

Title	大塚金之助訳 福田徳三補訂 マーシャル経済学原理
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.6 (1919. 6) ,p.799(135)- 800(136)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190601-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

定期券は一枚六十圓で販賣するのであるから、使用者は餘り多くあるまいと思はれる。然しながら、假りに多數の人が此定期券を購入するとせば、電車の雜沓は益々甚敷なるに相違ない。如何となれば、其購入者が極度に定期券を利用するは論を俟たずして明かであるからである。殊に此方案の缺點と看做す可きは特に中流以上の者の便宜を圖るの結果を呈するの一事に存する。勞働者階級の者は一ヶ月十圓の電車賃を支拂ふことが出來ず、又其の必要もない。殊に六ヶ月の電車賃を前拂するに於てをやである。

予輩の觀る所に據れば、現行の乗換制度を改善するよりも、寧ろ乗換制度並に往復切符を全廢し、距離の長短に拘らず一回の便乘に金二錢位宛を徵收することに定め、乗換切符に關する種々の弊害を一掃するを以て最善の解決策とせざるを得ない。此方案を實行すれば、或は一回

も乗換する必要なき乗客は増加するであらうが、一方に於て長距離の乗客即ち三四回も乗換するを必要とする乗客は減退するに相違ないが故に、結局乗客の總數は殆んど何等の影響を蒙らぬであらう。

而して若し回数券を發行して、之を各停留所附近の商店にて販賣せしめ、且つ車掌の手數を省き車内の混雜を防ぐ爲め、車内に於て乗車券を請求する者に對しては五割増位にて之を賣渡すことに定めなば、電車の能率を著しく増進するを得ると信ずる。

批評と紹介

大塚金之助譯『マル経済學原理』
福田徳三補訂

大正八年四月東京佐藤出版部發行
菊版本文九二九頁定價金六圓五十錢

本書は英國理論經濟學界の巨擘を以て目せらるマルフレッド・マーシャル氏 Alfred Marshall の大著にして、英文經濟原論中の白眉たるの稱ある Principles of Economics をば追句的に譯述せるものである。譯者大塚氏は本年商業學研究の爲め歐洲留學を命せられ、四月下旬渡米の途に上られし東京高等商業學校の經濟學教授であつて、夙に其の綿密周到なる經濟史的研究に依りて學界に知られてゐる新進の學者である。譯者既に其人を得てゐるのであるが故に、譯書の信頼するに足るものなるは云ふ迄もな

い。況んやマーシャル研究に於て其人ありと知られたる福田博士の嚴密なる訂正を加へられたるものなるに於てをやである。試みに譯文の數節を原文と對照せるに、譯述の忠實綿密にして、原著書の一言半句だに忽にせざる努力に驚嘆せざるを得なかつた。勿論、譯語の選擇に就きては見る人各々意見を異にする所ある可きも、大體に於て本書を不用に歸せしめ得る新譯書を作ることとは絶體に不可能ならずとするも、頗る困難なる事業と云はざるを得まい。

尤も本書は原著述の全部を譯載したものでなく、原書の第五編中第二章以下第十四章迄、第六編の一部分、及び附録の全部を省略してゐる。吾人は、大塚教授が三ヶ年間の研究を遂へて歸朝せられたる後、本書に省略せる章節中に於て少くとも第五編に屬する部分の譯文を加へて、再版を公にせられんことを切望せざるを得

ない。昨年飯島幡司氏は佛國經濟學原論中最も廣く世に行はれたるシャル・シード氏 Chail's Guide の原論 Principles d' Economie politique を邦譯し之を上梓せられたるが、今又大塚氏の筆に成るマーシャル原論の譯書に接するを得たるは吾人の欣喜に堪ざる所である。

松崎 壽著『工業政策』

大正八年四月東京巖松堂發行
菊版本文四一七頁定價金二圓

本書は大阪高等商業學校教授なる商學士松崎壽氏が同校に於ける氏の講義の稿本を基礎として著はされたものであつて、著者は先づ經濟政策をば『國家並に公共團體が統治權の作用に基きて行ふ各種の方策を指すもの』と定義し、之を分ちて農業政策、商業政策、工業政策、交通政策、植民政策及び社會政策の六種と爲すを便

なりと説き、更に工業政策は工業其のものに對する各種の方策のみならず、工業労働者に對する社會的施設をも包含するものなること認めたるも、本書に於て著者が主として論述せるは前者即ち狹義の工業政策上の諸問題に外ならぬ。而して、經濟研究の目的に就きては、著者は單に過去及び現在に於て各國政府が實際に採りたる政策及び其の結果を闡明するを以て足れりとせず、進んで將來に於て實施す可き方策を講究するに努む可きものなることを主張して居られる。次に、工業の意義に關しては、著者は工業を以て、(甲)原料に加工して其實質又は形態を變化せしむる行爲或は、(乙)此加工生産をは營利の目的を以て獨立の企業として連續的に行ふものと爲す二個の解釋を排し、『加工生産を繼續的に營む一つの生産組織』なる定義を與へ、之を出發點として工業と他種生産業との區別を明

かにせられてゐる。著者は更に是れより進んで企業聯合及び合同の性質並に利害、工業の保護獎勵策、工業教育、工業所有權、工業金融との關係等に就き多年の蘊蓄を傾倒して居られる。本書は分量に於ては必ずしも大著述と云ふ可きものでは無いかも知れぬが、著者の説く所簡にして而かも要を盡したる稀に見る快著である。工業政策論上造詣深き著者にして此著あるは蓋し偶然の結果ではあるまい。吾人は工業政策の研究者に對する絶好の一新參考書として本書を推舉するの機會を得たるを欣ばざるを得ない。